

○1番 春日御晴君

延永小学校6年、春日御晴です。私は、通学路の交通整備について、質問します。

最近、交通事故が増えており、行橋市も交通事故が数多く起きています。私たちの通学路も車が多く通り、不安が大きいです。なので、その不安や事故を防ぐためにも、交通量調査をして、交通量が多い所から信号機や横断歩道を設置したほうが良いと思うのですが、どうお考えでしょうか。

○後半議長 遠藤優奈君

執行部に答弁を求めます。

市長。

○市長 工藤政宏君

春日議員のご質問にお答えいたします。

まず、行橋市内、小・中学校合わせて17校ございますけれども、この通学路に関しましては、国道、県道、そして市道それぞれあるんですよね。その内の通学路を含めた行橋市の市道の総延長距離が約580キロ、市道だけで580キロあります。

議員がおっしゃったように、交通量の多い路線は非常に危険が伴いまして、特に交差点は車と歩行者の事故が最も多い場所でありまして、安全対策のために横断歩道をつくったり信号機を設置したり、そういったことが有効な手段と考えております。

ただ、これもですね、あまり交差点の所の全部に信号機を付けたりとなると、今度は交通渋滞につながったりする可能性もあるわけですね。そういったところで、これは市道についても市単独で決めることはできません。警察との協議が必要となってまいります。そうした場合は、交通量調査を行いまして、その結果に基づいて、交差点や過去に事故が起きた場所などを中心に、設置するというような流れになっております。

以上でございます。

○後半議長 遠藤優奈君

春日議員。

○1番 春日御晴君

信号機や横断歩道の設置は警察が行っていることは分かりました。それでは、通学路の安全対策として、市ではどのような取り組みをされているのでしょうか。

○後半議長 遠藤優奈君

執行部に答弁を求めます。

市長。

○市長 工藤政宏君

安全対策でございますけれども、基本的には道路といったものは、できる限り道路と歩行者道路を分けたほうが良いと考えておまして、市では現在、国の補助金を活用いたしまして、通学路の歩道整備を5箇所で行っております。

この際、道路や歩道の幅などを決めるために、先ほど申し上げた交通量調査を行っております。また、警察署、そして国・県・市の道路担当者と各小学校の関係者、例えば学校の先生やPTAの方が加わってくださる場合もあります。そういった皆さんで通学路の安全確保のために一緒に点検を行ったりしています。そして点検を行った結果、歩道に防護柵、ガードレールや柵を設置したり、それから道路改良、より道路を使いやすく安全なものにするための計画を立てまして、そしてその計画にのっとって整備を進めている次第であります。

また、それ以外にも教育委員会の取り組みとしましては、学校安全指導員といった地域の方々が協力してございまして、登下校時間帯の交通安全指導を行っております。

これはハード面と言いまして、道路を整備したり、それから信号機を設置したりというところ、これは大変重要なんですけども、果たしてこれだけでいいのかというところですね。これはICT・タブレット端末を導入したときに、フィルタリングだけではなくて、やはりソフト面と言いますけれども、リテラシー・モラル、要は我々の心の部分だったり備え、我々の取り組みの姿勢ですね。そういったところをどうしたらいいのかと、やはりソフト面といったものも重要になってきます。

一例、ちょっとですね、例を挙げると、日本というのは、人口に対しての交差点や信号機の量が先進国の中ではかなり多いと言われております。ところが交差点での事故発生件数というの、いま申し上げた先進国と比較すると、結構多いというデータがあるようなんです。これはどういうことなのかと言いますと、日本人は非常にまじめな国民性だと世界では言われております。私、実際に目の前で人が事故に遭うシーンを見たことがあるんですけども、信号機が青だと、そのまま渡っちゃうんですよ。ところが、本当に重要なことは何なのかというと、信号機が赤であろうが青であろうが、車が来ているかどうかということ、バイクが来ているかどうかということをしつかりと確認するという作業が最も重要なんですね。大切なことは車が走っているかどうか重要なんです。ところが日本人は、信号が青であれば、それを信じて周りを見ず、そのまま渡っちゃうという人が非常に多いという話を聞いたことがあります。

海外ではどうかというと、逆の現象が起こっているんですけども、信号機があっても、赤信号であっても車がなければ渡っちゃう、こういう国って非常に多いんです。これが良いかどうかは別としましても、本質的な部分の話では、車が

来ているかどうかが重要なんですよ。そういった意味では、やはり信号機を設置する、そういったところもしっかりと考えて進めていくと同時に、車が来ているかどうかという安全面を個々人がしっかりと考える、そういった教育プログラムといったものが、やはり必要なのかなと思っています。以上です。

○後半議長 遠藤優奈君

春日議員。

○1番 春日御晴君

丁寧な回答を、ありがとうございました。以上で質問を終わります。